不登校支援と「大人」の定義に関するブリーフィング・ドキュメント：セルフマネジメントとレジリエンスの重要性

エグゼクティブ・サマリー

本ドキュメントは、デジタルハリウッド大学名誉教授であり、企業研修講師や不登校児の親としての経験を持つ渡辺パコ氏のインタビューに基づき、不登校支援の本質、現代教育の課題、そして「大人」に必要な素養についてまとめたものである。

主な論点は以下の3点に集約される：

1. 不登校の再定義： 不登校をネガティブな停滞ではなく、自己管理能力（セルフマネジメント）を養い、個別の才能や関心を伸ばす「成長の機会」として捉え直すべきである。
2. マネジメント能力の欠如： 現代の教育システム（特に進学塾）は、学習内容だけでなくスケジュール管理まで代行している。その結果、学力は高いが自ら目標を管理できない「自律性の低い大人」が量産されている。
3. レジリエンスと物語の力： 現代の若年層に不足している「理不尽な事態に耐える力（レジリエンス）」は、純文学などの「回収されない物語」を通じて養われる。人生の不条理を疑似体験することが、真の大人への成長に不可欠である。

1. 不登校に対する視点の転換

渡辺氏は、自身の娘が小学校5年生から不登校になった経験を踏まえ、不登校を単なる「問題行動」ではなく、個人の成長プロセスの一部として捉えるべきだと主張している。

1.1 「登校」を絶対善としない考え方

- 学校に行かせること自体を目的化する必要はない。
- 重要なのは、その期間に子供が「停滞」せず、どのように成長の機会を確保できるかである。
- 周囲の大人は、教科の勉強以上に「社会的なテーマ」として子供の成長をサポートする意識が求められる。

1.2 実例：ダンスと通信教育による独自のキャリア形成

渡辺氏の娘は、以下のプロセスを経て社会に出た。

- 優先順位の確立： 幼少期から熱中していたダンス（大人向けの夜間レッスン）を優先し、学校の時間軸に合わせることをやめた。
- 自律学習： 中学校には全く通わず、通信教育（進研ゼミ）を利用して自らスケジュールを管理し、学習を進めた。

- 多様な選択肢の活用：単位制高校、大学入学資格検定（現：高卒認定試験）、通信制大学、シンガーソングライター活動を経て、最終的に大卒資格を取得し社会人となった。
- 結論：いわゆる「王道」の進学ルートを外れても、本人が納得できる形で能力を身につける選択肢は十分に存在する。

2. 現代教育の欠陥：セルフマネジメントの外部化

渡辺氏は、企業研修での経験から、高学歴でありながら「思考力」や「遂行能力」に欠ける若手社員が多い現状を指摘している。その背景には、教育段階での「マネジメントの代行」がある。

2.1 進学塾によるマネジメントの代行

現在の進学塾は、以下の2点を提供している：

1. 学びのコンテンツ：解法や知識の伝達。
2. 学びのマネジメント：スケジュール管理、進捗確認、目標設定。

かつては「自力」で管理すべきだったマネジメント部分を塾が請け負うようになった結果、子供たちは「言われた通りにこなす能力」は高まるが、自らプロセスを構築する能力を失っている。

2.2 セルフマネジメントの機会としての不登校

不登校の状態は、24時間を自分でどう使うかという究極のセルフマネジメントを迫られる環境である。

- ゲームやYouTubeに費やす時間であっても、「いつまでにクリアするか」「攻略本を書く（分析する）」といった目標を自ら設定できれば、それは学校や塾では得られない貴重な学びとなる。
- 学校行事（文化祭など）は本来プロジェクトマネジメントを学ぶ機会だが、終わった後の「メタ認知（振り返りと言語化）」が不足しているため、教育機会として十分に活用されていない。

3.「大人」の定義とレジリエンス（しなやかな強さ）

渡辺氏は、現代の20代～40代に見られる傾向として、理不尽な出来事に対する「耐性（レジリエンス）」の低さを挙げている。

3.1 現代における諦めの速さ

- 失恋、失業、仕事での失敗など、人生における「生身の現実」に直面した際、過度にダメージを受け、絶望したり極端な諦めに走ったりする大人が増えている。
- これは、人生には論理や努力では解決できない「理不尽さ」が付き物であるという認識が欠けているためである。

3.2「回収されない物語」の重要性

現代のエンターテインメント（ラノベ、異世界転生もの等）は、「伏線がすべて回収される」「嫌な相手を叩きのめす（ざまぁ）」といった、カタルシス重視の傾向が強い。しかし、現実の人生はそうではない。

- 純文学の役割：村上春樹作品などの純文学は、論理的に説明のつかない理不尽な状況や、結末が明確に回収されない物語を描く。
- なだめ効果：こうした物語を疑似体験しておくことで、現実に理不尽な目に遭った際、「これは物語で見たような出来事だ」と、自分自身を客観的に捉え（メタ認知）、立て直すことができる。
- 推奨される作品例：
    - 東野圭吾『人魚の眠る家』：事故という理不尽に対する家族の向き合い方、周囲の反応を描いた多層的な物語。
    - 村上春樹作品：非現実や理不尽に巻き込まれながらも、旅を経て変容していくプロセスの描写。
    - 古いフランス映画：ハッピーエンドやスカッとする結末ではない、打ちのめされたまま終わるようなリアリズム。

4. 支援者・保護者への提言

不登校支援において大人が果たすべき役割は、単に学校に戻すことではなく、子供が理不尽な状況を「やり過ごし」、自らの一歩を踏み出すためのサポートである。

- 親の意識改革：「なぜうちの子が」という理不尽さに直面した際、親自身が「人生にはそういうこともある」としなやかに受け止める姿勢を持つこと。
- フリースクールの役割：学習の代替場所である以上に、「学校に行かない代わりに、どのようなハッピーなことを創造するか」を子供と共に考える伴走者であるべきだ。
- 読書の推奨：効率や即効性を求めるSNSから離れ、他者の人生を深く疑似体験できる「小説」を読む時間は、将来的な人間としての厚み（レジリエンス）を作る。

結論

不登校という経験を、セルフマネジメント能力を獲得し、人生の理不尽さを乗りこなすための「大人への準備期間」としてポジティブに活用することが、真の支援に繋がる。

本資料の出典: 不登校支援コミュニティ「ハートスクール」インタビュー：渡辺パコ氏「セルフマネジメントの大切さと大人とは？」